

# 鬼と仏と

住友を破壊した男・伊庭貞剛

江上 剛

## 第二回

### 第二章 尊王攘夷

1

1

一八六〇年（万延元年）三月二十四日、江戸桜田門外において彦根藩主で大老職の井伊直弼が水戸藩浪士ら十八人によって襲われ、惨殺された。

彦根藩は、同じ近江の藩である。父貞隆が代官として預かる伯太藩とは比べようもないほどの雄藩で、石高も三十五万石と圧倒的に大きい。

貞剛が貞隆から聞かされた話によると、井伊直弼は一八五八年（

安政五年<sup>あんせい</sup>）七月二十九日に、アメリカのハリス駐日総領事との間に日米修好通商条約を締結したことで、反対派の恨みをかったということだ。

鎖国政策は、幕府の祖法と言われている。ところが井伊が進める政策は、鎖国を反故<sup>ほんこ</sup>にするものだ。井伊は、鎖国は籠城<sup>ろうじやう</sup>するようなものであり、諸外国に対抗するには国を開かねばならないという考え方を持っていた。

これに水戸藩前藩主徳川斉昭<sup>なりあき</sup>らが反対しており、井伊と鋭く対立していた。

「井伊様は、反対派の人たちを登城禁止にしたり、投獄したりされたからのお」

父は沈痛<sup>ちんつう</sup>な表情になった。

「鎖国政策は廃止されるのでしょうか？ 我が国は、開国に踏み切るのでしょうか」

貞剛は聞いた。

父は、首を横とも縦とも分からぬように振り、「さあ、どうなるかは分からん。しかし、アメリカに続いて諸外国が同様の通商条約の締結を求めてくることは必定<sup>ひつじょう</sup>だ。鎖国は廃止せざるを得なくなる。なにせ相手は強大な武力を持った国々だからのお」といつになく弱げに答えた。

父の考えが、開国か鎖国かは分からない。しかしペリーが一八五三年（嘉永六年）七月八日に浦賀に来航して以来、国内は地に足がつかない状態がいよいよ激しくなっているのは貞剛も感じていた。「隣国の清は、イギリスと戦って敗れ、北京まで占領されてしまったということだ。同様のことが我が国にも起きるかもしれん」

父の表情がますます暗くなる。ただでさえ癩癩持ちで笑顔など見せたことがない父だ。気持ちが暗くなると、その表情は痛々しささえ覚えるほどだ。

清は圧倒的な大国である。ところがアヘン貿易でイギリスと対立して戦争となり、敗れてしまったのは二十年ほど前のことだ。

それ以来、清はイギリスやアメリカなど欧米列強の進出を許してしまった。それに反対する人々が太平洋の乱と呼ばれる騒乱を起こし、国内は内乱状態になったという。乱を鎮圧するという名目でイギリスをはじめとする欧米諸国は、上海や北京などに軍を送り込み、遂に北京を占領してしまったのだ。

この情報は、瞬く間に我が国にもたらされ、幕府ばかりではなく、貞剛のように近江で暮らす若者にも衝撃を与えたのである。

このままではいけない。このままではこの国は、アメリカやイギリスに蹂躪されてしまう。そう考えるのも無理はなかった。

貞剛は十五歳になっていた。もう立派な大人である。

「孝明天皇は攘夷を唱えられ、外国との交易に反対されている。それに反して井伊様がアメリカと通商条約を結んだことが国論を分けることになったのだ。我が伯太藩がどうなるかは分からん。彦根藩は、水戸藩憎しとなつているようだが……」

「我が国も、かの清のように内乱状態になつてしまふのでしようか」  
「そうならないとは誰も保証できん。しかしそうなつては列強に付ける隙を与えてしまうことになる。そうならないように幕府の方では公武合体をしようという意見がある」

「それはどのようなことでしょうか？」

「公とは朝廷のこと、武は幕府だな。皇女和宮様と徳川家茂様との婚姻を成立させ、朝廷の威を借りて幕府を支えようとする運動だ。しかし朝廷を唯一の政治権力とみなして攘夷を行うという尊王攘夷運動と対立することになる。尊王を突き詰めれば、幕府の権威を失墜させるということになるからな。難しい時代になつたものだ」

父の眉間の皺は深くなる一方だ。

情報というものは不思議なもので、江戸から遠く離れているとはいえ、近江にも頻々と時勢の動きが多くの人によつてもたらされる。父は代官という職業柄、邸の前を通る中仙道を行き来する武士や僧、商人らから江戸や京の情報を入手しているのだ。

「なあ、貞剛。私は、藩主渡辺様に呼ばれて和泉に行かねばならぬ。」

後のことは頼んだぞ。くれぐれも家を守り、軽挙妄動はするな」

父は、藩主渡辺章綱の命により泉州伯太藩本藩詰めとなり、単身で赴任することになった。

近江西宿には貞剛と母田鶴、そして三人の弟、一人の妹が残ることになった。

貞剛は嫡男として伊庭家を守るといふ重責を担うことになったのである。

泉州に旅立つ父の見送りを終え、貞剛は庭に植えた梅の木を眺めていた。

この梅の木は貞剛が自ら植えたものだ。当初は小さな苗に過ぎなかったのだが、随分と成長し、今では貞剛の腰ほどの高さになっている。

「あの時はおかしかったなあ」

貞剛は、父が鳥籠を相手に格闘した時の事を想いだしていた。

何年も前のことだ。ある時、雛鶏を手に入れた。その可愛さにと、うしてもそれを飼いたくなくなった。

小さきもの、か弱きものに対する愛情が貞剛は人一倍強かった。

それは七歳まで父の愛を知らずに育ったことが大きく影響していると思われる。

自分が父を知らなかっただけに、他に対しては自分が父であるよ

うに振る舞い、他者を守ることを自分に課しているところがあつた。  
いわゆる長男気質ということだろうか。

しかし父は、小動物が嫌いだ。雛鶏を飼うことは絶対に許さない  
だろう。

そこで貞剛は、庭の外れで雛鶏を籠に入れ、父に内緒で飼うこと  
にした。

元来、手先は器用だ。竹を切り、竹ひごを作り、籠を編んだ。そ  
こに雛鶏を入れ、父に見つからないようにして餌えさを運んだ。

貞剛の世話の甲斐があり雛鶏は順調に成長し、籠の中で大人の鶏  
になった。

そしてついに恐れていた事態になったのである。

ある朝、鶏が元氣よく時を告げるべく鳴いた。まずいと思つても、  
すでに時は遅し。父は鶏の声を聞きつけ、隠していた竹籠を見つけ  
てしまったのである。

「なんだあ、これは！」

父は大声で怒鳴り、辺りを見渡した。

自分を探しているに違いない。そう思つた貞剛は、邸外に逃げだ  
した。しかし鶏が心配になり、通りの方から板塀いたへいの節穴ふしあなを覗いた。

父は、太い棒を納屋なやから持ち出し、それを頭上に振りかぶると鶏  
の入っている竹籠に思い切り、打ち下ろした。

「あつ」

目を閉じると同時に、思わず声が出た。鶏が殺されたと思った。

「ケッコーケッコー」

鶏の大きな鳴き声。恐る恐る目を開ける。

父が、鶏の入った竹籠相手に奮闘している。竹籠を棒で打つが、

貞剛が作った竹籠は非常に丈夫で、父の棒を跳ね返す。その弾力で

竹籠は宙に躍り、中の鶏は羽を大きく広げて、鳴きたてる。

父が棒を振るえば振るうほど、竹籠は鶏の鳴き声とともに庭を跳

ね回る。その後を父が必死で追いかける。その内、父はくたびれ果

てて、庭に腰を下ろしてしまった。

あまりのおかしさに貞剛は大きな声で笑ってしまった。

「貞剛、出てこい」

父が、大声で叫んでいる。

目の前で鶏が羽ばたき、勝ち誇ったように鳴いている。

父の痛癢は尋常じんじょうではない。収まらないうちに顔を出すと、今度は

鶏の代わりにこつちが棒で殴られてしまうので、貞剛は隠れたまま  
でいる。

「もう、諦めた。鶏は飼っていい。怒っていない」

父が言う。

貞剛は、覚悟を決めて板扉の陰から出た。

腰を下ろしている父の元にゆっくりと歩む。

「起こせ」

父が手を延ばす。貞剛は、その手を掴み、父の体を庭から引き離す。

鶏は相変わらず勢いよく鳴いている。

「鶏は飼っていい。しかしあれ一羽にしろ」と鶏を憎々し気に睨みながら、「なかなかできの良い籠だ」と棒を杖代わりにして、邸の方に戻って行った。

貞剛は、鶏を籠から出してやった。父の許しを得た以上、籠の中で不自由な思いをさせておくのは可哀想だ。

鶏は、籠から飛び出すと、さも満足そうに「コケコッコ」と鳴き、すぐに庭草を啄み始めた。

「あの時以来、父を怒らせないために動物ではなく木や草に楽しみを見つけることにしたのだったなあ。父がお役目を終えて、ここに戻って来る頃には、この梅の木はどのくらいに成長していることだろうか」

貞剛は、再び、父と離れて暮らす寂しさを思った。

一方、いつまでも寂しさに浸っているわけにはいかなかった。長男として一家を守る重責を担わねばならないと強く自覚していたからだ。



「いったい世の中はどうなっていくのだろうか」

邸の前の、京から江戸に通じる中仙道には、武士や浪士たちが忙しく行き来するのが目につくようになった。

貞剛は、漠<sup>はく</sup>たる不安とともに心の中の熱量が徐々に上昇していくのを感じていた。

2

「なかなか筋がいいぞ」

師範の児島<sup>こじまいちろう</sup>一郎は、貞剛を褒めた。

「ありがとうございます」

額に流れる汗をぬぐいながら、貞剛は答えた。

貞剛は、八幡町<sup>はちまんちよう</sup>にある児島一郎の道場で剣術を学ぶようになった。

父が不在であり、自分の力で家を守らねばならないという思いが剣術に向かわせたのである。

——時代が変わる……。

貞剛は、今までの幕府による太平の世から激動の世に変わりつつあるのを実感していた。

何かをしなくてはならない。その何かはまだ掴みかねていたが、体の中からの熱気を発散するには武術が最適だった。

同郷の友人たちと諮り、肥前（長崎）大村藩の脱藩浪士、児島が八幡町に開いている道場に通い始めたのである。

大村藩は、幕府から、長崎奉行として外国貿易の窓口である長崎の管轄を任される立場だが、藩内は佐幕派と尊王派の対立が激しさを増していた。

尊王派の児島は脱藩し、遠く近江の八幡町に剣術道場を開いた。

ここは近江商人の発祥の地であることから分かるように中仙道の要の地であり、各藩の脱藩浪士たちと連絡を取るには好都合な地であった。

児島が教えるのは四天流剣術である。四天というのは持国天、多聞天、增長天、広目天のことを指す。これらは戦の神であり、その名に違わず居合などを採り入れた実戦的剣術だった。道場での稽古の後は、近くの馬淵村の易行寺の住職から国文漢籍の教えを受ける。これが貞剛の日課となった。

八幡町の道場は西宿の邸からかなり離れている。道場へは、早朝のまだ暗いうちに入らねばならない。自分で粥を作り、それを啜り、母や家人を起こさないようにそつと邸を出ていく。

夏は耐えられるが、冬は痛いほど寒い。琵琶湖から吹いて来る冷たい風が体を凍らせる。それでも貞剛は道場に通い続けた。

我慢強い性格であると言えはそれまでだが、まるで何かにとりつ

かれているかのようだった。時代が貞剛の背中を押しているのか、それとも貞剛が時代の背中を追いかけているのか、そのいずれかだろう。

児島の口からは、幕府では欧米列強に対抗できない、このままだと我が国は、清のように彼らに侵略され、植民地になってしまうなどと、時局についての話題が出る。彼らと戦うためにも剣術を習得しなければならぬ。貞剛は、手のまめが潰れるほど、激しく木刀を振った。

「西川吉輔よしすけという人の名を聞いたことがあるか？」

児島は貞剛に聞いた。

「ごいません」

貞剛は答えた。

「なかなかの人物のようだ。会ってみるといい。私と同じく国を憂うれいているお方だ」

児島は、貞剛に吉輔の住まいを教えた。場所は、道場の近く、野や洲郡江頭えがしら村の農家だった。幕府から「親類預け」の処分を受けている身だという。

吉輔は一八一六年（文化十三年）七月二日に八幡町の干鯛問屋ほしかの長男として生まれた。

二十四歳で家督を継いだが、商売よりは学問に熱中し、平田篤胤あつたね

派の門下に入った。

ここでは古道といわれる、いわゆる国学を学んだ。これは中国という外国の思想である儒教などを排し、古事記や日本書紀などから大和民族本来の思想を探ろうというものだった。

吉輔は、ただ机上で学問をするだけの人ではなかった。

国学を学ぶうちに国家意識に目覚めたのである。欧米列強が開国を求めて押し寄せる中で、このままでは国が亡びるといふ危機感をいだき、伊藤俊輔（のちの博文）など各地の尊王攘夷の志士たちと交流するようになる。やがて京に上り、天皇や公家にも国策を建言するなど、尊王攘夷派の志士たちにおいてひとかどの人物と評価され、名を知られていく。

一八六三年（文久三年）四月九日、京都等持院に納められていた足利尊氏、義詮、義満三代の木像の首が折られ、位牌とともに持ち去られる。そしてなんとということだろう、それらが三条河原に晒されたのだ。

世にいう足利三代木像梟首事件である。

木像には斬奸状が打ち付けられていた。その内容が過激だった。

足利尊氏らこれまでの武士の幕府は朝廷をないがしろにしてきた逆臣であると主張し、「朝廷を補佐し奉りて、古昔を償う処置なくんば、満天下の有志、おいおい大挙して罪科を断たすべき者なり」

と明らかに倒幕を呼び掛ける内容だったのである。

これには京都守護職松平容保が怒った。事件そのものは死人が出たわけではない。質の悪い悪戯いたずらとでも評すべきものだ。しかしその思想性、倒幕への意思が問題だった。容保は、徹底して容疑者の捕縛を命じた。

そして事件に関与したとして浪士や農民、町民などと共に吉輔も逮捕されたのである。処分は「親類預け」。吉輔の故郷、八幡町から離れた江頭村の農家唯七家ただしちに幽閉され、監視下に置かれることになったのである。唯七家は吉輔の妻の実家である。

貞剛は、剣術稽古を終え、児島に教えられた江頭村の唯七邸を訪ねた。

邸は、朝鮮通信使たちが歩んだ朝鮮人街道沿いにある。

瓦屋根に板張りで補強した土塀を巡らせた屋敷。土塀越しに邸内には白壁の土蔵も見える。相当な分限者ぶげんしゃの邸宅だ。

「ここはどこかにおられるのか」

貞剛は、門の前に佇んだ。たたず

吉輔を訪ねることに全く不安がなかったわけではない。児島は、「なかなかの人物である」と言ったが、幕府から処分を受けている身である。

八幡町出身の剣術仲間吉輔のことを聞くと、誰もが良く言うば

かりではない。

——吉輔は大きな商家の主人であるにもかかわらず、まったく商売はせずに問題ばかり起こす厄介者だ。やつかいもの 幽閉先でも困っているという話だ。あんな者に関わり合うと、君まで幕府から睨まれるぞ。

——吉輔の家は八幡町でも大きな商家の一つだ。あの馬鹿者のお陰で家は潰れるだろうと言われているぞ。近づかない方がいい。なんととっても君は代官家の跡取りではないか。

それでも貞剛は、魅入みいられたようにここまで来てしまった。児島が言った「国を憂う人」という言葉が気になっていた。

父がいれば、反対しただろうか、ふと思った。  
門のそばに下男と思われる男がいる。

貞剛は、吉輔に会いたい旨むねを伝えた。

男は、露骨ろこつに嫌悪感にくみを滲にじませた表情を浮かべた。

「こちらへどうぞ」

それでも腰を低くして、貞剛を邸内に案内した。

邸内はよく手入れされた玉砂利たまじやりが敷かれ、櫺けやきの巨木が屋敷おほを覆うように空に枝を張っている。見上げると、すっきりとした夏の青い空が広がっていた。貞剛は気持ちを落ち着かせるために大きく息を吸い、そして吐いた。

玄関の前には、石橋がかかっている。それを渡り、屋敷内に入る。

そこは広い土間になっている。その向こうには畳敷きの座敷がある。

貞剛は、土間の踏み石に草履ぞうりを脱ぎ、座敷に上がった。

「そこでお待ちください。呼んで参りますから」

下男が姿を消した。

貞剛は、座敷で正座して待った。児島道場の帰りであり、携えてきた防具や竹刀しなひなどを脇わきに置く。

しばらくすると奥から袴はかまをはいた男が歩いて来る。それほど大柄ではない。貞剛と同じくらいの五尺五寸（約一六五センチメートル）ほどだろう。

商人と聞いていたが、瘦身そうしんでいかめしく見える反面、目が優しい光を湛たえている。貞剛を認めると、なんともいえぬ柔和にゆうわな表情になった。とても幕府から「親類預け」の処分を受けている身とは思えない。

男は貞剛の前に、身軽に腰を下ろして、胡坐あぐらをかいた。

貞剛は、両手をつき、体を折り曲げ、頭を畳すに擦り付けるように下げた。

「児島道場で修行しております、西宿、伊庭貞隆の嫡男、貞剛と申します。突然、お訪ねしまして申し訳ございません」

頭を下げたまま、声を張り上げた。

「伊庭殿、面おもてを上げてください。私は罪人ですぞ。そんな者にそれ

ほど大仰おびきやうに頭を下げられたら困ります」

吉輔は、屈託くつたくなく笑った。

貞剛は、おずおずと頭を上げた。そこにはおおらかな笑顔の男が貞剛を正面から見つめていた。吉輔の背後から、鋭気が放射されているのが見える。それが貞剛を包み、体の内から感動の震えが伝わってくる。

貞剛は、こんな経験は初めてのことだった。人に打たれるとはこういうことを言うのだろうか。

ある人物に出会った時、普通はその人の性格や話す内容から、素晴らしい人であるなどと評価を下す。しかし真に優れた人物の場合、出会った瞬間に、その人物の放つ気迫に圧倒され、理屈抜きで感動してしまうことがある。

孔子こうしに出会った時の弟子たちもそうであるかもしれない。舍利弗しゃりほつが釈迦しゃかの弟子になった時もきつとそうだっただろう。彼らは、理屈抜きに、この人の教えを乞こいたい、この人について行きたいと願ったのだ。

今、貞剛も同じような思いになっていた。ああ、なんといいおおらかさ、広大なのだろうか。

「君の評判は耳にしています。代官の子息なのにまったく偉ぶったところがないそうですね。児島道場からの帰り道、老いた行商の老



人のために道を譲り、時には彼らの荷を担いでやることさえあると聞きました。素晴らしい心がけです」

吉輔は言う。

事実だった。貞剛は、西宿から八幡町の道場への行き帰りに重行商の荷を抱えた老婆たちに多く出会う。道が狭いため、貞剛は彼女たちに出会うと、すぐに田の畔あぜに下りて道を譲った。時には重い荷に難儀している老婆がいたら、その荷を貞剛が代わって担ぎ、一緒に歩くことさえあった。いつしかこのことは周辺の評判となっていたが、吉輔の耳にも届いていたのだろう。

「当然のことだと思っています。私どもは、武士が一番偉いと教えられてきましたが、この国には民百姓、商いをする商人などがいて、彼らが働くことで我々を、いや国を支えてくれています。武士が威張っているだけでは駄目なのではないでしょうか。孔子様も『孝慈なれば則ち忠あり』とおっしゃっています」

貞剛は、論語為政篇にある、孔子が魯ろの家老季康子きこうしから人民を治める方法を尋ねられた際、「莊を以てすれば則ち敬す。孝慈なれば則ち忠あり、善を挙げて不能を教うれば則ち勸む」と答えたことを例に挙げた。

孔子は、李康子に対して人民に尊敬と忠義と勸業を上から要求するのではなく、まず自らが姿勢を正さねばならないと教えたのであ

る。

突然訪ねて来た十七歳の若者に、吉輔は非凡な才を認めた。

吉輔は四十八歳。その年齢差は三十歳以上にもなるが、この若者を教え、導きたいと強く感じた。まさに貞剛と吉輔の魂が強く感応したのである。

「近江八幡は近江商人の故郷だ。ここから全国に商いに出て、江戸で成功をした人も多い。かく言う私も、実は代々の商人の倅せがれなのだよ。商人は、君たち武士と違って学問などしなくて良い。読み書き算盤そろばんさえできればいい。余計なことに首を突っ込むなど言われ続けしてきた。ところが私は、どういうわけか学問好きになってしまったのだ。そして学問をすればするほど、世の矛盾むじゆんを知り始めた。私はどうして豊かな商人の家に生まれたのか。周囲には貧しい人が多い。我が家は彼らを搾取さくしゆしているから豊かなのではないか。翻ひらがえって武士はどうなのか。泰平の世に安住して、貧しい人々を搾取しているだけではないのか。それは私と同じではないのか。学べば学ぶほど、矛盾が私を押しつぶしそうに膨れふく上がった。折しも、今や、欧米列強が徳川幕府に開国をせまり、この国のあり方を変えようとしている。私は、この機を逃さず、新しい世を作らねばならないと思うようになったのだ」

吉輔の言葉が徐々に強くなる。幽閉され、人との交わりを断たれ

ている憤懣ふんまんが、その口から勢いよく放出されているかのようだ。

「新しい世とはどのようなものなのでしょうか」

「日本に開国を迫る欧州やアメリカには士農工商というものはない。誰もが自由に意見を言うことができ、誰もが世の中の指導者になることができる。武士だけが庶民の上に立っているとは大違いだ。誰でもが、その持てる才能によって世に出ることができる。だから西欧やアメリカは強い国になったのだ。たとえばアメリカには、大統領という人々の総意によって選ばれた人格識見の高い人物がいて、人々を指導している。徳川家に生まれたから、当然のように偉いということはないのだ。これが真の国家というものだ」

吉輔は諸外国の情勢を説いた。

「しかし諸外国などの制度を全て良きものとして真似る必要はない。良きものは全て我が国には古いにしえより備わっていたのだ。私に言わせれば、諸外国は我が国の国体を映したようなものだ。我が国には、仏教や諸外国の文化が入ってきたが、その根本を探ると、神道に行き当たるのだよ。天皇という神道の中心におられる方が、この国を治め、人々は幸せに暮らしていたのだ。人々はそれに感謝し、国に忠義を尽くしていた。忠とは、この国を思う心なのだ。この根本精神が、今や乱れている。そのため国体が動揺しているのだ。我が国が諸外国からの侵略を免まぬかれるためには、今一度、国に忠義を尽くす

精神を取り戻さねばならない。そのためには武士に預けた政治を、天皇という神道の中心であられる唯一無二のお方に戻すのだ。すなわち我が国を以前のように、徳川家に代え天皇中心の国にする。そうすることで国がまとまり、天皇以外の人々は誰もが平等で、その才能によって評価される国になる。そんな国にしたい。そう願っているのだ」

最後の、徳川家に代え、というくだりは、吉輔もさすがに声を潜めた。

貞剛は、強く衝撃を受けた。

「徳川の世は終わりとなるのでしょうか」

貞剛は息を呑み、膝を前に進めた。

「先の大老井伊直弼殿が、アメリカの要求に屈してしまい天皇の裁可を得ずにアメリカとの間で通商条約を結んでしまった。私は孝明天皇の側近で攘夷派の三条実方公にお目通りを願い出て、こうした井伊大老の動きをご報告をしたのだ。結果、この時は『町内預け』となった。これが私の受けた最初の処分だよ。井伊殿が、水戸藩などの反感を買い、浪士たちに殺されてしまわれた。誠に気の毒なことだが、幕府はますます弱体化している。このままではいずれ近いうちに、我が国は諸外国の植民地になってしまうだろう。この国が終わるのだ。そうならないために私は商人ではあるが、国事に奔走

しているというわけだ」

吉輔は、平田篤胤派の国学を学んでおり、天皇中心の、古来の日本の国体を取り戻すことがこの国を守ることだと考えていた。そのため尊王攘夷派の志士たちと行動を共にしていたのである。

そのような中で吉輔たちが起こしたのが、足利三代將軍木像梟首事件というわけだ。

貞剛は、吉輔の話で初めて「国」というものを意識した。

「国とは、彦根藩や泉州和泉藩などとは違うのですか」

「違う。国とは、そんな小さな藩であるとか近江国というものではない。かつてこの日の本ひもとには民がいて、それをいつくしむ王がいたのだ。それだからこそ民は安堵あんどして暮らすことができた。藩などという意識を捨てねば、国は一つにならない。一つにならねば、諸外国に占領されてしまうのだ。君の家は確か源氏以来の名門で佐々木宮の神主を務めた家柄だと聞く。それなら君の体の中に、天皇を尊敬する血が流れているだろう。今こそ天皇中心の国にしようではないか。時代は動いている。君のような若者がその先頭に立たねばならない」

「私にはまだなんとも……」

貞剛は、吉輔の激しい言葉に圧倒され、戸惑っていた。

しかし父の不在で、表面では強がっていたが、内心は不安であっ

た若者の心に、なにか火をつけたことは確かだった。

「多くの若者が、藩の柵を超えて京に集まり、尊王攘夷に命を懸けている。君も彼らに後れを取らないように学び、励みなさい」

「はい」貞剛は、平伏した。「先生、またこちらに立ち寄らせていただいてよろしいでしょうか。いろいろ教えて頂きたいと存じます」

「勿論だ」吉輔は笑みを浮かべた。「ただし私のことを、家を顧みないで国事に奔走する愚か者だと悪口をいう者もいる。だから今度来るときは、こつそりと忍んで来なさい」

吉輔は、なにやら悪戯を考えているような顔つきで言う。

「忍んで来るのですか」

貞剛は、聞き返した。

「そうだよ。屋敷の裏にある戸を開けておく。いつでもそこから入ってきなさい。なにせ私は幽閉の身だから必ずいる。もしもいないことがあれば、その時は私の部屋がこの奥にあるから、そこにある書物でも読んでいなさい」

「分かりました」

貞剛は、再び深く平伏すると、その場を辞した。

帰路、興奮が収まらない。初めて国家というものを意識させられた。徳川幕府に代わる天皇中心の国家とはどのようなものか。国難に対処するには、どうしたらいいのだ。自分は何を為すべきなのか。

父貞隆なら、自分の疑問にどう答えるだろうか？ 父は、泉州和泉藩の代官職にある。幕府からこの西宿らの統治を委託されている立場だ。もし吉輔が言うように幕府がなくなれば、父の立場はいつたいどうなるのだろうか。その時、自分はどうなるのか。考えれば考えるほど分からない。

ただ興奮するだけだ。天皇中心の国にまともらねば、諸外国に侵略され、占領されてしまう。そうなっては絶対にいけない。

貞剛は、空を見上げた。すっかり暗くなっているが、中天に月が煌々と輝いている。月光が貞剛に降り注ぐ。

心が熱い。時代は動いている……。吉輔の言葉が蘇る。

若者が先頭に立たねばならないと吉輔は言う。いったい自分は何をすればいいのだろうか。なんのために剣術を学び、なんのために易行寺の住職から漢籍を学んでいるのか。

「ワーツ」

貞剛は、月に向かって腹の底から大声を発した。意味はないが、そうせざるを得ない気がしたのだ。体内の力が、どこかにはけ口を求めている。

鳥が大声に驚いたのか、羽音を立てた。

——母には今日のことは話さないでおこう。勿論、父にも……。

貞剛は、吉輔に出会ったことは父母に秘密にしなければいけない

と考えた。

きつとあの熱い人は、自分を父母が思う場所ではないところに連れて行くだろうと直感したからだ。

貞剛は、防具と竹刀を脇に抱えると、「えいつ」と自らを鼓舞し、月明かりに照らされた畦道を走った。息が切れる。汗が吹き出す。それでも走る。この道はいつたどこに通じているのだろうか。通いなれた道なのにいつもと違うように感じていた。

3

貞剛は、児島道場での剣術稽古が終わると、直ちに吉輔の幽閉先に向かった。

時には、剣術稽古の前に行くことがあった。

暗い屋敷の裏木戸に手をかけると、門はかかかっていない。

貞剛が来ることを見越して外してくれているのだ。貞剛は、人目につかぬようにこっそりと中に入る。すると、庭の先にぼんやりと行燈の灯がついた部屋がある。

吉輔が起きているのだ。

貞剛の気持ちは弾む。早く傍に行き、声を聞きたいという思いが高まる。



まるで夜陰に忍んで恋しい人に会いに行くようだと貞剛は、自分の行動におかしみを感じる。入門させて欲しいと改まって頼んだわけではないので、勝手入門と言うべきものだろう。本当の師に出会うというのは、これほど心が弾むものなのか。

貞剛の父、貞隆は泉州和泉に赴任したままで不在である。本来なら多感な青年期である貞剛は父の影響下にあつて、父から世の中のことを教えられることが多いはずだ。しかし、今は、父の代わりに吉輔が務めていると言っても過言ではないのではないか。

吉輔は、漢籍や国学を貞剛に教えた。それは人生や世の中や時局に目を開かせるものだった。

「私たちは中国から伝来した漢字というもので物事を考えている。例えば、天と書けば、『アメ』と呼ぶな」

吉輔は問いかける。

奇妙なことを言いだすと思いつい引き込まれる。

「しかし古来、私たちの先祖が文字を持たなかったとき『アメ』と称したモノや事象は、『天』と同じだろうか。確かに文字がなければ、考えは多くの人に伝わらない。しかし文字によって本来の意味が変化し、失われることもある。そのようなことを考え、考え抜き、古来の日本人が抱いていた考えに迫らねば、本当の日本の姿は見えてこない。諸外国と対抗するためにも本当の日本というものを突き詰

めねばならない」

吉輔は、本当の日本人、本当の日本と言う。それまで藩の意識が強かった貞剛に、日本という意識が強く植え付けられていく。

『道の道とすべきは、常の道に非ず。名の名とすべきは、常の名に非ず』という言葉を知っているであろう」

吉輔は問う。

「はい、老子の言葉です」

貞剛は答える。

「では意味は何か」再び吉輔は問う。

うつと貞剛は言葉に詰まる。老子の言葉は覚えたものの、その意味まで深く考えたことはない。

「道というものは誰かがつくったものだ。誰かが歩いた跡だ。特に私たちは中国の儒教というものが道だと考えている。しかし、それは本来の道であろうか。古来の日本には、いわゆる儒教の道はなかった。おそらく別の道はあっただろう。否、道いなさえなかったかもしれない。そこに儒教という外来の道がつくられ、私たちはそれが古来の道だと思って、そこを歩んできた。それが正しかったかどうか、日本人が歩むべき道はどのようなものなのか、私たちは今、改めて考え抜かねばならない。学問とは、表面に現れたものをそのまま信じるのではなく、その奥に隠れている真まことを探る、あるいは考え抜く

ものなのだよ。自分の頭で、徹底的に真を考え抜くこと。名に隠れた本質を見つけ出すことだ」

吉輔は、ふいに立ち上がり、襖ふすまをあける。夜が深々と更ふけている。

「こちらへ来てみなさい」

吉輔が呼ぶ。

貞剛は、膝を折りつつ、近づいていく。

「ほら、美しい月だろう」

吉輔が指さす方向に満月が輝いている。

「はい。とても美しいです」

「月はなぜ宙に浮かび、我々を照らしながら動いているのかな。いや、我々を照らすことなど、微塵みじんも考えていないだろう。例えば、このように月について、宇宙の本質について、何事にもとられずに考え抜き、その真を探ることが学問だ。とにかく自分で考え抜くことだ」

貞剛は吉輔の傍に座り、じつと月を眺める。

考え抜くこと……。

何事にもとられることなく、表面を覆う名に惑わされず、本質を探り、その真を追求するのが真の学問である……。

真綿まわたに水が沁み込むというのはこういうことをいうのだろうか。

貞剛の心に吉輔の考えが沁み込んでいく。今まで見えていた景色が

全く別のものに見えて来る。それは貞剛にとって感動と評すべき喜びだった。

「貞剛です。入らせていただきます」

貞剛は、行燈の灯がともる部屋の前の廊下に正座し、入室の許可を求める。

「入りなさい」

中から声がする。

貞剛は緊張した。というのは行燈の灯で二つの影が見えるからだ。話し声も聞こえてくる。部屋の中に吉輔以外に誰かがいる。来客なのだろうか。

戸を開け、膝を折ったまま中に入る。軽く一礼してから後ろを向き、戸を閉める。

背後から吉輔ともう一人の男の視線を感じる。一瞥いちべつしたところ、若い男だ。

再び、吉輔に向き直り、平伏する。

「貞剛殿、紹介する。品川弥二郎しながわや じろう殿だ」

吉輔がにこやかな笑みを浮かべる。

「品川弥二郎と申します。よろしく願います」

若者は軽く低頭する。背筋がまっすぐ伸びている。輝くような目

をした精悍せいかんな印象を与える人物だ。貞剛より、少し上に見える。

「伊庭貞剛と申します。よろしく願ねがいします」

貞剛も頭を下げた。

「弥二郎殿は、長州藩士だ。かの安政の大獄で悲運さいごの最期を遂げられた吉田松陰先生しやういんの愛弟子まなでしだよ」

吉輔が言う。

吉田松陰の名は聞いたことがある。長州で松下村塾しやうかそんという私塾を開校し、多くの有為な人材を育てた。しかし一八五九年（安政六年）に井伊直弼が行った安政の大獄により、外国船で密航しようとした罪で捕縛され、刑死した。

吉田松陰の名前が出た時、行燈の灯が揺れ、弥二郎の表情が陰つたように見えた。

「松陰先生の遺された志を継ぎ、国事に奔走しております。西川吉輔先生にも大変にお世話になっております」

弥二郎は堅い表情を崩さずに言った。真面目な人柄のようだ。

「惜しい人を亡くしたものだ。井伊殿は同じ近江国の彦根藩主だが、申し訳ないことだ」

吉輔の表情が曇くもった。

「いえいえ、西川先生が頭を下げられるには及びません。井伊殿は、その結果、水戸藩などの浪士たちに殺されてしまいました。今では、

彦根藩にも水戸憎しで同志が増えつつありますから。松陰先生はこの世におられませんが、その志は死してなおと言いますか、死したればこそと言いますが、この国に広がっております」

明るい、正直な人柄というのが、弥二郎の言葉の端々からうかがえる。貞剛は好感を持った。

「弥二郎殿は、天保十四年（一八四三年）生まれだ。貞剛殿より四歳ほど年上になるかな。君たちは共に有為な若者だ。これを機会に協力して、この国を造ってもらいたいと思つてな。よろしく頼みましたぞ」

吉輔が相好を崩す。

弥二郎は、長州藩士。今の時局の中心的存在だ。どのような話が聞けるのか、興味深い。

「時局はますます厳しくなっているようすな。弥二郎殿は、今年初め、イギリス公使館を高杉晋作殿らと焼き討ちされたのでしたな」

吉輔は弥二郎に聞く。貞剛は、息を呑み、弥二郎の言葉を待った。

「他言無用に願います」

弥二郎は、周囲を憚るように目つきを鋭くした。「イギリス公使がいる時はやりませんでした。人を殺めるよりも攘夷の心を示すことが重要だったからです」

一八六三年（文久二年）一月三十一日、弥二郎や高杉晋作、久坂くさか玄瑞げんずい、伊藤俊輔、井上聞多もんた（後の馨かおる）、山尾庸三やまおら長州藩士十数名が、品川御殿山ごてんやまに建設中のイギリス公使館を焼き討ちしたのである。公使らが滞在中に実行しようとしたが、藩主の説得で一旦は中止したものの、高杉らは攘夷の意思を示すために公使らの不在時に決行した。幕府は、結局、高杉らを犯人として検挙できなかった。「尊敬します。命を懸けて国のために戦っておられるのだから」吉輔は、感心したように言った。

貞剛は、まじまじと弥二郎を見た。自分より年上ではあるが、さほどの違いはない。それなのに攘夷に命を懸けている。それに比べて自分は……と後れをとったような気持ちになった。

「長州藩は、まだ割れております」

弥二郎は言った。

長州藩の事情は複雑だった。佐幕派と尊王攘夷派に分かれて対立していた。

長州藩は一八六三年（文久三年）六月二十五日に、下関海峡しもとのせきを通過するアメリカ船に向かって庚申丸こうしんまる、癸亥丸きがいまるが砲撃した。

実はこの日が、長州藩が幕府を通じて朝廷に攘夷決行を迫った期限だったからだ。藩の尊王攘夷派は、藩を動かし、アメリカ船を攻撃することで国内を一気に攘夷に向かわせるべくこの砲撃を画策し

たのだ。続いてフランス艦、オランダ艦にも砲撃を加えた。

「列強は手ごわいです。完膚なきまでやられてしまいました。多くの仲間が亡くなりました」

同年七月、イギリス、アメリカ、フランス、オランダは報復に出た。下関の町を徹底的に砲撃したのである。

「そうですか。そこまで国力の差がありますか。余程、心せねばなりませんな」

吉輔は眉根を寄せた。

「実は、我々はやみくもな攘夷は無謀ではないかとの考えに傾きつつあります。そこでこれも口外無用ではありますが……」

弥二郎は声を潜めた。

貞剛は、どんな話になるのかと興味津々の思いで耳を傾けた。

「我々の仲間が密航と言いますか、極秘でイギリスに勉強に行きました。『人間の器械』になるためです」

「ほほう、人間の器械とは」

吉輔は大きく頷いた。

「藩政の中心におられる政務役すふまさのすけの周布政之助様は、西洋の学問を学び、西洋の事情に通じていなければ、これからの日本は駄目になるというお考えの方です。松陰先生も同様でした。それで密航しようとして罪に問われました。そこで周布様は、慎重にことを運ばれ、



伊藤俊輔、井上聞多<sup>もんた</sup>、山尾庸三、遠藤謹助<sup>きんすけ</sup>、野村弥吉<sup>やきち</sup>（後の井上勝<sup>まひる</sup>）の五人を器械にして日本を動かすのだとイギリスに密航させたのです。無事、向こうに着いたようで安心しております」

弥二郎は言った。

「人間の器械とは、日本を動かす器械なのですね。素晴らしいと思います」

貞剛は興奮した。

「伊庭殿、この話は内密に願いますぞ。なにせ密航はご法度<sup>はつと</sup>ですか」

弥二郎は、にやりとほくそ笑んだ。純粹に興奮し、胸を躍らせる貞剛に好感を覚えたのだろうか。

「分かっていません。誰にも言いません」

貞剛は口を固く閉じた。

「伊庭殿は、この国がどのような国になればいいと思われませんか。今まで通り幕府中心なのか、天皇を中心とした世なのか」

弥二郎は聞いた。

貞剛は、吉輔から学ぶことによって、奇妙なことに気付いた。

幕府も、反幕府も、天皇の奪い合いを演じているように思えたのだ。

諸外国の攻勢で、権威が失墜した幕府は、攘夷の考えの強い孝明

天皇の支持を取り付けようとしている。今まではどんなことも幕府の一存で決めていたことを思えば、情けない状況ということになるのだろう。

「私は西川先生の下で時局や国家などを学んでおります。毎日、曇った目に光が差し込んでくる思いでございます。しかし未熟者の私には、まだまだ世の中がどのように変わっていくのか、はたまた変えるべきなのかはよく分かりません。幕府は、権威を高めるために公武合体と言い、幕府の武と天皇の公を婚姻という形で結び付けたと聞きます」

幕府の公武合体派は、一八六二年（文久二年）三月十一日、將軍家茂と皇妹和宮との婚姻を成立させた。

貞剛は、弥二郎を見つめた。弥二郎は、この若者が公武合体を持ち出したことに、意外そうに小首を傾げた。

「しかしこのような一時的な策では時代は動かさないと 생각합니다。一方、尊王派の方々も天皇の権威を我が物にしようとされておられる。両派が共に天皇という権威を取り合っているように思えるのです。日本という国は天皇が中心になって治められるのが本筋だと西川先生に習いました。そうであれば天皇のご意思はどこにあるのか、それを見極めねばならないのではないのでしょうか。物事の根本を見ることが重要かと存じます。勝ち負け、欲得で動いてはこの国は強

くならないと思います」

貞剛は、言い終えて弥二郎の顔を見た。少し驚いたように目を見張っている。不味まずいと思った。

「申し訳ございません。生意気なことを申し上げました」

貞剛は、慌てて平伏した。

「いやいや、これはこれは……」弥二郎は、破顔して声を大きくした。「西川先生、いいお弟子さんを持たれておられますな」

「はい。その通りです。非常に見込みのある青年です」

吉輔も笑っている。

貞剛は、おずおずとした様子で頭を上げた。

すると、今度は弥二郎が居住まいを正し、平伏した。

「伊庭貞剛殿のご意見、もつともでございます。私もこの国の根本はどこにあるかを考えつつ、行動いたします。ただの権力争いに終始しておれば、それこそ欧米列強の思う壺つぼになります。よくぞ申してください。ありがとうございます」

「そんな、頭をお上げください」

貞剛は、困惑した。しかし弥二郎の素直な態度が強く胸を打った。

この人とは、これからも長く関係を維持したいと願った。

「弥二郎殿、お願いがあります」

貞剛の言葉に弥二郎は顔を上げた。

「なんでしようか」

弥二郎が楽しそうに微笑ほほえんでいる。

「私の兄として親しくさせてもらいたいのです」

貞剛は頭を下げた。

「私も、願うところです。兄などというのはおこがましい。同輩で結構です。共にこの国の未来のために命を捧げましょう」

弥二郎は、貞剛の手を強く握った。貞剛もその手を握り返す。弥二郎の熱が直接、伝わってくる気がする。貞剛は、いつまでもその手を握りしめていた。

〈つづく〉